

消失する里山

高度経済成長と都市化にともなって、住居やゴルフ場などのリゾート地、工業用地の需要が高まってきました。

里山はもともと山奥にあるのではなく、人々の暮らしと近い所にあったことから、真っ先に開発の対象となりました。



荒廃する里山

石油や化学肥料が容易に手に入るようになると、薪や炭、肥料用の落ち葉が採取されなくなり、雑木林は放置され、荒廃が進むようになりました。

また、農業者の高齢化や担い手不足などにより、耕作放棄地が増えています。それに伴い、水路やため池も管理放棄され、水深が浅くなったり、陸化が進行しているところが増えています。



絶滅のおそれのある里山の生きものたち

一昔前まであたりまえのように里山で出会えた生きものたちも、今では簡単に見つけることができなくなってきました。

カブトムシやクワガタなど雑木林の人気者も、子どもたちが目にする多くのものは店で売られているのが現実なのです。



メダカ ドジョウ ゲンゴロウ タガメ オオムラサキ



カスミサンショウウオ トノサマガエル イシガメ リンドウ キキョウ

自然のままに・・・では 生きられない 里山の生きものたち

手入れの行き届いた棚田



耕作放棄された棚田



稲作をやめた水田は、3～4年もするとセイタカアワダチソウなどが生い茂る草地になります。見た目には自然が戻ったように見えますが、そこにはカエルやメダカもすめません。かつての日当たりの良い田んぼや、水路といった水条件がもたらした植物や水生動物たちの王国は、次第に失われていきます。

雑木林についても、かつては10～20年おきに伐採され、炭や薪に利用されていました。また、林床は、堆肥用に落ち葉かきされ、見通しのきく明るい林でした。そのような林にカブトムシやシュンランなどさまざまな動物がすんでいました。

しかし、雑木林に人の手が入らなくなると、林床は笹などが茂り、これらの生きものたちが、すめない林となります。

里山の生きものたちは、長い年月をかけて人々が育ててきた里山という自然の中でこそ、すみ続けることができるのです。

管理された雑木林



放置された雑木林



3 コラム 里山に侵入する外来生物

もともとその地域にいなかったのに人間活動によって他地域から入ってきた生物のことを外来生物といいます。

私たちは、農作物や家畜、ペットなどたくさんの外来生物を利用していますが、一方で、意図的に放したりして、野外で繁殖してしまうものもあります。このような外来生物はもとも

と里山にいた生きものたちを捕食したり、日光など生育に必要な環境を奪い取ったりして、生態系に大きな影響を与えています。

一度、定着(帰化)してしまった外来生物を排除するのはとても困難です。ペットや観賞用として飼っている動植物をむやみに捨てない心がけが必要です。



ブラックバス アライグマ



ブラジルチドメグサ ミドリガメ
(ミシシッピーアカミミガメ)